使を以て申されけるは、斯る炎天に御坊は何ど笠を被さゞるや、幸に持たせ合したる古笠候ゆへ、これを着せられよとて笠一かい差出させられければ、一休も禮を正しくして曰ひけるは、御志のほど、近頃祝着申して候、併しながら此法師は、天を笠に着し候へば、暑くも、ぬるくも候はずと曰ふ、使の者立かへり、斯と主人に申上ければ、大名も如何さま此坊主常人にては無きぞとて、必ず馬の蹴上もかけぬやう、日蔭を除きて通せよとて、猶も同道申しける、さて泊りの宿をも御構ひ無く、同宿し給へと申し遣はしける故、程なく暮に及びぬれば、同じ宿に泊り給ふ、其夜彼の大名の御方より使を以て申送られけるは、晝のほど笠を參らせんと申したる者にて候旅は物うきものにて候、殊に此頃の暑さに、さこそ疲れさせ給はん、御酒一献參らせん、此方へ入らせ給へと有りければ、一休過分の事ありとて、使を案内にて行かせ給ふ、さて奥の間へ通り給へば、大名聲を掛け給ひて、いかに御坊よ、和國のならひ人に逢ふときは笠を脱ぐとこそ承るに、何とて笠を脱ぎ給はぬぞ、と申されける、言葉の下より、脱ぎ候ても掛け置くべき處無く候と曰ひける、扨こそ一休和尚よと推し參らせ、いよ〳〵種々馳走申されけるとかや、其席にて、種々の面白き問答など有りつれども聞きもらしぬ。

○幼稚の引導

一休いまだ僅か十歳の御とき、師の長老田舍へ行き給ひ、御留主の處へ、檀徒うちに相はてたる者あり、急ぎ御引導下されたきよし、使申し來りければ、御他行にて候へば、御歸りの日限も知れざるよ

し返答ありしに、然候へば御弟子方にても苦しからず、是非〳〵とたして頼み、早や死人を寺へ舁き込みける、折ふし長者の弟子も居合せざりければ、一休然も殊勝氣に用意して、さて棺に向ひて死人を指ざし、次に我身を指ざし、又両手を擴げて、何の言葉も無く、喝とぞ曰ひける、斯る折から長老の俄に歸り來給ひて、物かげより此有さまを見給ひ、後、此引導は如何なる事ぞとありければ、一休申しけるは、さん候、死人をざ指したるは、汝が死したる故にと申す事、某を指ざし候は、此小僧にと申す事にて、両手を擴げたるは大なる耻を我にかゝせたるぞと申したる事にて候ゐりと答へ給ふとなり。

○乞食に小袖を與ふ

一休和尚十二月末つかた、東山吉田といへる所へ御越なされける歸るさに、今出川口の河原に、全裸なる乞食の伏し居たりけるを御覽じて、さても不憫の者やと思しめし、御小袖を一重脱ぎて取らせらるゝに、此乞食悦ぶけしき無く、袖打通し着たりける、一休仰せけるは、さても不思議なる乞食かな、一錢だにも戴き伏拜むは、乞食の習ひなるに、悦ぶけしきも見えざるは、嬉しくも思はざるかと問ひ給へば、乞食答へて申しけるは、御身は我に小袖を呉れて嬉しくも思はざるかと答へければ、一休手を打ち、扨も過つたり、一大事の悟り此處なりけるぞや、如何さま此乞丐人、常人にはよもあらじ愚僧が愚痴を晴らしぬるこそ嬉しけれとて、掌を合せ、目を塞ぎて拜み給ふ、其うちに彼の乞食は消失せけん、小袖ばかり殘りける、

不思議ありける事とかや。

○傾城に引導

赤阪の宿に、いつきと云へる名高き遊女ありけるが、暫くの病にて身まかりけり、親しき者ども集りて申しけるは、夫れ女は五障三從の罪ふかきに、況して流れの身なれば、大かたにてば叶ふまじ、いざや一休和尚を頼みて吊はんと、御旅宿へ參り、斯く罪ふかき女にて候、御なさけに御導引おし下され候はゞ有がたくこそ候はめと、只管願ひければ、一休易き事とて、直ぐに輕々しく其家に至り、御引導遊ばしける、

僧は衣を賣り女は紅を賣る柳はみどり花はくれなゐ

喝と曰ひければ、棺の内より光明かゞやくと見へしが、其夜に日頃

親しくなしたる者どもの夢に、成佛遂げたるよしを告げたるとなり

○煎茶賣に引導

これも赤阪の宿に、煎茶を往來の旅客に賣りて世の營みとせし男ありしが、病も無くて頓死なしたるを、近き邊りの者ども寄り集り、水おどをそゝぎ、氣つけなど飲ませけれども、更に其甲斐なかりしかば、折ふし一休御通りありけるを幸ひの事とて、其よし申上げ、御引導を願ひければ

一ぷく一せん一期の間末期の一句雲客の話

喝と御引導ありければ、是れも往生を遂げたりと、不思議に邊りの者の夢に見えけるとなり。

○大食の話

或時淀の外大ふうを言ふ男ありけるが、一休和尚の御相伴の非時を賜はりけるが、和尚の仰せけるは、さても其方は珍らしき大食かなと曰ひければ、彼の男いや是れは食ぶると申す程にては無く候、某が若き友どち寄り合ひ、賭餅いたしたるとき、飾米一斗搗かせ、我等一人して食すれどもいまだ喰ひ足らざりければ、過りに粟餅澤山有りける故、それをも殘らず喰ひ儘したるに餘りに腹ふくれたるに依り、河邊へ走り行き、大なる舟あるを見るより、其舟を横に持ちて、川水を壇止め申したりと、首ふりて語りければ、一休問し召しさても夥しき大食かな、それ程の大食は珍らしくさりながら、愚僧の存じたる山伏ありしが、これも大食人にて賭食して餅米二斗を搗かせて、それを一人にて殘らず喰ひ、餘りに腹ふくれけるにや、廣き松原へ走り出で、三かゝへばりの松の木を捻をり、腰を掛け休みける所へ、小さき蛇の大なる蛙を呑み、苦げに見えしが出來り、傍らの見なれざる草を食ひけるに、ちみ〳〵と腹へりたり、山伏これを見て、さて好き事を見付けたるものかなと、件の草を取りて喰ひけるが、運の盡きたるにや、此草人の消る草にて、山伏は忽ち消えて、二斗のもち、兜巾、すゞかけ、法螺の貝、金剛杖などもちにもたれたると語り給へば、彼の男顔色を變へて恥入り、早々歸りて其後二たび參らざりけるとかや、總じて與がる空言は言はざるものなりと、彼の男の大ふうを誡め給ふとなり。

○國司へ下帶を遣はす

或る御大名の家中に、片岡彌太夫と云ふ者あり、一休其宅に在しけ

ると、此所の地頭聞つけて使者を以て申上げるは、長の旅に御疲れおさるべし、見ぐるしく候へども私宅へも御入來ありて御うさを晴し給へかしと申つかはしければ、和尚能くこそ御招き辱しとて使者と共に地頭の宅に來り給へば、地頭も本意にや思ひけん、さまゞ御馳走申上げて、さて何にても御手跡を下されたしと乞ひければ、一休易き事なり、旅宿へ歸りて認め進ずべしと約束し、程なく彌太夫が方へ歸り給ふに、引つゞいて使者來り、先ほど御契約申したる御手跡此者へ下さるべしと言ひ來れば、和尚も館りせわしくや思しけん、彌太夫が書さしたる文のありしを使者に渡し給ふ、使者悦び持歸り、主人に渡しける、開き見れば見知りたる彌太夫が手跡かり是は不審なる事かな、使の誤りにてこそあるらめと、使の者を導ぬ

れども、直々御手より賜はりしと曰ふに、さては餘りに急ぎて申したる故、御取ちがひありしものにやと、又も使を以て最前下されしは彌太夫が手跡と見え申候、願くば御自身にかゝせ給ふをこそ望みには候へと申し遣はしければ、和尚うなづき、左程に深く御望みならば、爭で惜み申すべきまでして、したゝかに包みたる袋をぞ渡されける、使者持歸りて主人に渡せば、やがて袋を開き見れば、さも汚れたる古き下帶にてぞありけるが、地頭どのにも手を打ちて笑ひける其後又も御入のをりふし、柳とばかりの大文字にて、一字書きて送り給ひぬ、又古き屏風に、何とも形ちの知れぬ繪ありけり、亭主に問ひ給へば、餘り古くありて見分け申さず、私親どもが申しつるに馬とか牛とかやらんに御座候よし申さるれば、和尚牛ならば角ある

べし、角なければ馬なるぞと曰ふ、亭主申されけるには、御繪の序に、此繪にも賛を遊ばし下されよと申されければ、易き事と曰ひて大文字にて、馬ぢやげなとぞ遊ばしける、其繪今にありて、めでたき御藏に納まりて、たからの其一つとぞ成りたるとぞ。

○子はたから

一休の御寺へ常々御心やすく參りける百性の許より、家貧しきうへに子多くもちて、其日も過し離きほどのものにて有りけるが、和尚の許へ參り、さて〳〵私どもは如何なる因果にて候哉、御存じの如く子どもは追々出來、當年二歳にあるを下として　都合十二人まで出來其中には年子も御座候私夫婦の者は、日に三度の飯さへ腹に足るほど食されたる事とても無く、是れが眞の子の地獄へ落ちたと申すものかと存ずれど、それならば何の子が憎いと申すものも御座かく候、又斯樣の貧家へ生れ來る子供も不仕合せかと思へば、不憫にも存候、これも前生の報いにて候や、御聞せ下されよと申しければ和尚打うなづき、尤々、さりながら下の子は、いまだ二つと御言やれば、まだ〳〵幾人生まるゝやら知れぬ必ず夫婦の者の氣を儘きぬやうにして、或時は一つ所へ集り、寢酒にても飲みて氣を晴らし、仕込んでば出かし〳〵するがよいと仰せければ、びつくりして、和尚さま、此上生れてば、夫婦の者は何となり候やらんと申しければされば、それに就て話すことあり、昔し奈良の都の頃、白木の長者とて、日本にては誰知らぬ者も無き大百性ありけるが、其隣に恰も其方のやうなる貧家に、種腹一つにて十八人の子を持ち、今其方の

申さるゝ通り親二人ば正月元日より暮の大晦日まで、食の足る事を知らす、隣の大百性の事を羨み居けるが、或る年の夏、炎天に大勢を集め、麥を蹈み、園の内は固より、門外までにも乾し廣げたるに貧者は其麥を見るに附けても、此乾したる麥むしろ、十八枚だけ有るならば、子供に一枚づゝ充て分ちなば、我等夫婦は此苦みも有るまじきにと思ふ事をも知らず、子供等ば足に任せて遊び歩き、目の屆く所には一人も居ぬ事よと思ふをりから、俄かに空かき曇り、大雷鳴りはためき、大夕立降り來り、大道ば忽ち大河の如くになりて伴の乾したる麥、なか〳〵取入るべき間も無く、殘らず流したるが隣の夫婦ば門口に出で、如何せんと想ふ所へ、彼方此方より子供は走り歸り、頭の數を算へ見れば、一人も不足おく、其上格別身をも濡らさゝりける、依て昔より子供はたからと云ふほどに、出かしやれ〳〵、其長者と云へるは、大和國十市郡、天の香具山の東北にすこし高き岡山を、長者やしきと云ひ、又其わきに、白木塚とも箸塚とも云へる塚あり、これは其時の長者、主人は固より家内出入のものまで、一飯ごとに其箸を捨て、再び用ゐざれば、其捨てたる箸、自然と山にありしとて、箸塚と云ひて今に在り、又佛説にも鬼子母神といへるは、三千人の子を持ち給ふ、其うち一人を隱され、夜及と成り給ひしと云へる事もありとて、歌よみて給はりけり、其歌に

親とおり子と成來るも今ならず二世も三世も儘きぬ契ぞ

數もおき子を賣る人もありと聞く親では無うて鬼の再來

親は過去わが身は現世子は未來後生大事と子をば育てよ

○瓢簞の曲遊び

一休和尚御手前拂底の時にやありけん、一條戻橋の辻に高札をたてられける、

一此度日休老和尚一休一明六通を得て瓢簞をひつくり返す
望みの方々見ぶつ可有者也
今月今日よりはじめ申候

と遊ばされて、紫野に芝居を構へ給ひける事とて言はやしければ、京わらんべ老若男女貴賤貧富も分かず、足を空に爲して群集ぜ爲し芝居も濟みぬれば、さらば時分はよきとて、一休御用意あり、御衣の前に大なる瓢たんをぶらり〳〵と附け給ひ、兩手に撥を持ちて、西より東へ、東より北へ、北より南へと飛めぐり、跳返り、何度幾たびも爲なしたまひ大音を上げ、たんひよう、たんひよう〳〵とて二十べんばかり踊り廻り跳ねまはりおどし給ひて、其後樂屋へ走り入り御自ら太鼓を打ちたまひ、是れが替り〳〵とて、幾らず追出し給ふ、見物のものども、是れは如何ある事ぞとて、興がるもあり、或は今に始めぬ和尚の戯けかなと、暫くほ口も得塞がぬものも多かりけるとかや。

一休和尚終

明治四十一年九月[illegible]日印刷
明治四十一年九月[illegible]日發行

著者　竹庵道人

複製不許

發行者　大阪市南區安堂寺町四丁目百九番邸　井上尙一
發行者　東京市麴町區飯田町二ノ四十番地　井上鐵次郎
印刷者　大阪市西區北堀江上通一丁目　日出民助

發行所　大阪　東京　井上一書堂

253
852

092883-000-9

特64-307

一休和尚

竹庵　道人／著

M41

DBQ-0181